

ども討死なしたりけん。但し信長記・北陸七國志等の戦史に其の名所見なし。おもふに、山本若狭は當國土著の人なるべし。城上賀茂の社藏注進雜記に載せたる永正享祿中加賀國金津庄の古文書に、山本與五郎・山本民部丞・山本越前守などの名見ゆ。是等の人々の子孫ならんか。富樫記・官地論に、長享二年石川郡高尾城へ富樫政親の籠城したるを取巻きける本願寺一揆の賊將中に、山本圓正入道といふ人見わたり。此の山本圓正は江沼郡那谷の近邑山本村より出でたる人ならんかといへり。彼の山本氏の人々と若しくは同族にて、若狭守家藝もその子孫なりければ、山本圓正以來世々本願寺の下知に随ひ、一揆の魁首と成り、組子を支配せしものなるべし。

○霞ヶ池

此の池は、石浦舊社地の北方なる麓にて、本多氏邸内の園中にあり。昔は大なる池にて、石浦砦の外羅郭なりしかと、年を逐うて埋もれ、稍、周圍減少すといへども、于今尙沼の如く成りて残り。古來霞ヶ池と呼べり。

○霞ヶ野

此の地邊より北の方、本多町地境なる疊屋橋の地邊へかけ、昔より霞ヶ野と呼べり。此の地邊は、東方の後地は小立野山のがけ下にて有りけるゆゑにや、毎朝霞深き事他所に倍せり。故にむかしより霞ヶ野と呼べりと云ひ傳へたり。一説に、霞ヶ野は名所也といへれど、古歌に見えたるは、常陸の霞山・霞の浦、武藏の霞の關也。  
後撰集戀二 順徳院御製  
ほのかにもしらせてし哉吾妻なる  
かすみの浦の海士のもしほ火  
續千載集春上 前大納言母  
おなじくは空にかすみの關もがな  
雲路の雁をしばしとどめん

○馬場町

石浦舊社地の下なる堅町をば、古來ばんば町と呼べり。舊傳に云ふ。昔佐久間玄蕃尾山在城の頃、此の地を調馬場とす。故に今逆も馬場の體裁存すと云ひ傳へたり。依りて此の一町をば、従前本多氏下邸の頃より、馬場町とて町名と成りたりとぞ。今下本多町一番丁とす。

○玄蕃松

此の松は、馬場町に居住せし本多氏元家士河合氏の邸地にあり。甚だしき老樹にて、むかし佐久間玄蕃の調馬場なりし頃の遺木なり。故に玄蕃松と稱すと云ひ傳へたりと。按ずるに、此の地邊は金澤城地の近邊にて、廣坂下堂形前より僅に隔れり。然れば天正八・九年の頃玄蕃盛政尾山に在城して、調馬場をば此の地に設け、爰に來りて馬術の稽古を家人になさしめけん。その頃馬場の土居に植置きたる遺木の僅に残りたるものなるにや。但し明治廢藩の際其の木を伐採して、今はこの事を云ひ傳ふるのみ。

○風呂屋町

此の町は、大乘寺坂の下なる本多町と呼べり。此の町の地邊、むかしは本多下邸の外にて、町屋共ありて、其の頃風呂屋ありしゆゑに町名に呼びたりしが、後に本多氏の下邸内へ取込み、家士の居邸とするに及びても、尙古名に據つて風呂屋町と呼べりといふ。今は本多町に屬す。本多氏の元家士青山永保曰く、大乘寺坂の下より、今いふ風呂屋町の地邊・大乘寺屋敷跡等、寶曆の頃までは本多下屋敷外の

地なりしかど、寶曆大火の後油車牛右衛門橋口、今云ふ茨木町茨木氏舊邸の邊揚地と成り、右代り地として大乘寺屋敷二千歩許を、下邸地繼ぎの事ゆゑ賜りたり。といへり。平次按ずるに、茨木町なる茨木氏の舊邸は、寶曆十年六月本多下邸の地内九百餘歩を賜はりたるなり。然れば大乘寺跡の地を代地として本多家に賜はるといへるも、同時の事なるべし。

○風呂屋來歴

文安元年の下學集に、風呂湯殿也。日本之俗呂作爐。大誤。又曰。爐火器也。風呂温室義同也。とあり。和訓栞に、浴室をふると稱するも風呂より出でたる語なるべし。湯ぶる。居ぶる。慮ぶる等あり。といへり。平次按ずるに、諸人諸ごみの温室は、東鑑建久三年三月二十日の條に、於山内有百箇日温室。往反諸人並土民等可浴之由。被立札於路頭。是又爲法皇御追福也。と見え、また延應元年五月廿六日の條に、前武州爲禪定二位家御得脱。被積作善事。年々歳々未緩。其中於彼法華堂之傍被建温室。令結善薪等雜掌人。毎月六齋日可浴僧徒之由有沙汰云々。とあり。温室は則